

社会マネジメント学科と私

宮 澤 乃里子

テレビ局で、ディレクターをしていた頃には、大学で教えることになるなど、考えたこともありませんでした。正直に言えば、社会マネジメント学については、よくわかっていません。私の担当は、メインメニューではなく、サイドメニュー。必修ではなく「こんなものもあります。好きだったらどうぞ」という感じでしょうか。

私自身は、大学での専攻は、教育心理学。(怠け者でしたが・・・) テレビディレクターとしては、子ども、趣味、美術番組、国際放送などを担当していました。昔の仲間は、大学のHPを探しても、私の名前をなかなかみつけれないと言います。それは、私の所属が、子ども教育学科かメディア情報学科に違いないと思ってしまうからのようです。

なぜ、社会マネジメント学科所属なのかは、この学科の選択肢の多さと学科誕生の経緯に関係があると思われます。いろいろな視点やアプローチで「見つめ」「見つけ」、その先に「表現し」「創り出す」ためには、映像やメディアの扱いを知っておくことは、有効です。

「なぜ、この学科か？」と同じくらい「なぜ、放送局をやめて、この大学にきたのですか？」とよくきかれます。放送局の仕事は、もう充分にやったので、他のことをやってみたかった、というのが理由の1つ。もう1つは、若い人に伝えたいことがあると思ったからです。

放送局にいたおかげで、取材などを通して、普通では知り得ないたくさんの面白い話を知り、素晴らしい人たちに会いました。メディアの作り手側の視点は、経験しないとわからない視点でもあります。その経験や視点を、自分だけで持っていては、もったいない。これから伸びる若い世代にこそ伝えられたら、嬉しいと考えたのが、大学にきた理由です。

テレビ番組は、受け手と作り手では視点が違い、両方を知ると、違った側面が見えてきます。そのために、作り手側を経験してみることが大切です。「クリエイティブ技法」の授業では、ラジオ番組を作ってみることで、作り手を経験してもらっています。現在は、DJ番組を作っていますが、音楽の選び方やおしゃべりなど、それぞれ個性が出て、面白い。声を出しているうち、表現することの快感を知り、完成させた喜びも感じるようです。

今まで制作されたラジオ番組では、竹取物語を現代に置き換えた、わがままアイドルの話や、地方出身の学生がそれぞれの方言を披露しあうものなど、プロが考えないようなユニークな作品ができました。この延長線上にゼミがあり、ゼミでは、映像作品を作っています。

「エンターテインメント特講」では、イベント企画を実際にやっています。役割をきめて、準備をして実行。うまくいくことよりも失敗して、反省することが、これからのヒントになります。パーティーで、料理の発注ミスをして、あやうく大幅な予算オーバーになりそうになったことがあり、いい勉強になりました。

講義科目では、理屈ではなく、できるだけ実際に経験したことを例にして話しています。「子どもとメディア」では、以前に私が制作していた『おかあさんといっしょ』という番組を取り上げています。ちょうど私が作っていた時期と、今の学生が2,3歳だった時期が一致。私が作った番組を見ていたお客様の成長した姿に巡り会っていることになります。その頃の番組のビデオを見せると、学生は大喜び。子ども時代のメディアの影響を考える材料になります。

放送文化研究所の主任研究員だった時に、調べたことや、テレビの歴史を博物館に展示するプロジェクトで仕事をしたことも役にたっています。何がどこで役にたつかは、わからないものです。テレビの仕事と大学の仕事は、まったく違う世界ですが、どんな経験も使い方によって、マイナスになることはないのだと思います。

大学の授業は1コマ90分。テレビ番組だったら、大型企画や特集の時間枠で、準備に半年や1年を費やす長さです。時間をかけて専門家の知識を集めて作られた番組を活用しない手はないと気づき、番組をコピーしたり編集したりして、映像資料を自分で作っています。ディレクター時代に、資料として録っていたビデオもありますので、誰よりも映像を多く使う授業なのではないかと思います。

とにかく大学の4年間は、何にでも挑戦できる時。多方面の先生のそろっている社会マネジメント学科は、羨ましいような学科です。もう1度大学生に戻るなら、この学科を選びたい。教える側も、この学科の多様性を楽しんでいます。